ぐんぐん すくすく！相生っ子!

住所　相生市緑ヶ丘４丁目 5-5
電話　0791-23-5070
FAX　0791-22-7211
E-mail　ikusei-aioi@bz03.plala.or.jp

新年あけまして　おめでとうございます

人々皆が心を寄せ合い、思いやりが溢れる世の中で、これからの子どもたちの成長を見守っていける年の始まりとなればと強く思っています。

１月12日は「成人の日」で、相生市でも「二十歳のつどい」として、新しく 20 歳を迎えた若者を祝う式典が開かれます。因みに今年、相生市で、今年、20 歳を迎えられるのは、 241 名だそうです。

20 歳になる直前に、母親にこんな手紙を渡した青年がいました。恥ずかしくて、直接は渡せなかったので、大学の入学式直前に、下宿先を訪ねた母親のコートにそっとしのばせた手紙だそうです。

「親愛なる母上様」

**あなたが私に生命を与えてくださってから、
早いものでもう二十年になります。
これまでに、ほんのひとときとして、
あなたの優しく温かく大きく、そして強い愛を
感じなかったことはありませんでした。
私はあなたから多くの羽根をいただいてきました。
人を愛すること、自分を戒めること、人に愛されること……。
この二十年で、私の翼には
立派な羽根がそろってゆきました。
そして今、私はこの翼で大空へ翔び立とうとしています。
誰よりも高く、強く自在に飛べるこの翼で。
私は精一杯やってみるつもりです。
あなたの、そしてみんなの希望と期待を
無にしないためにも、力の続く限り翔び続けます。
こんな私ですが、これからも
しっかり見守っていてください。
また逢える日を心待ちにしております。
最後に、あなたを母にしてくださった神様に
感謝の意をこめて。**

翼のはえた“うし”より

「世界平和を作り出す一翼を担いたい。
国と国との信頼関係を作るのは人と人。
だから、一人でも多くの人と話したい」。

広島市安佐北区出身の神戸大学生だった、加藤貴光さんは、ジャーナリストの落合信彦さんに触発されて国際情勢に興味を持ち、国連職員を目指していました。

しかし、1995 年の阪神・淡路大震災で被災し、21 歳の若さで亡くなりました。

あの日、兵庫県西宮市の倒壊した自宅マンションのがれきの下で息絶えたそうです。

この手紙に，ミュージシャン，奥野勝利さん＝兵庫県姫路市夢前町＝が曲をつけた**「親愛なる母上様」**を下のQRコードから聞いてみてください。

「一人では無理」

「なぜかきらわれない生徒指導」（前 哲央著 東洋館出版社)より抜粋

自分がそう思っていて、生徒とよい関係を作ろうとしていても、職場の先生方全員が同じ考え方をしているとは限りません。むしろバラバラな想いで仕事をしていることの方が多いでしょう。それぞれの考えもあります。大事にしたいことも違います。

自分が評価されることを重視する人もいるし、仕事よりも「プライベートのことを大事にするぞ」と割り切っている人もいます。考え方にも違いがあり、常に優しく丁寧に生徒に接することが正しいと思っている人もいれば、生徒には常に厳しく接しなければならないと思っている人もいます。中には生徒のことはどうでもよくて、自分の仕事や自分の評価にしか興味がない人もいるでしょう。いろいろな人がいる中で、自分一人で生徒からの人気を上げていき、信頼関係を築いて、良い学校にしていこうというのはほぼ不可能です。

まずは自分の行動を示します。どうすれば人気のある先生になるか、どうすれば生徒から慕われ、信頼される先生になるかを示すのです。そして徐々に広げていく。「このように言いましょう」「このような接し方をしましょう」という方法を広げていきます。

賛同してくれる人は必ずいます。うまくいけばその方法が広がっていくこともあるかもしれません。そして転勤を繰り返しながら、自分の信頼を確実に積み重ねつつ「信頼される良い学校」を増やしていきます。多くの先生が賛同してくれて、同じ気持ちの先生が増えてくると、現在のような、学校が変に批判されて、先生の仕事がやりにくい世の中も、少しずつ解消されるかもしれないと私は小さくて大きな希望を描いています。結局はまず一人から始めるのです。そして、先生も生徒も満足するような「良い世の中」に少しずつでも近づいていくことが将来的にあるかもしれない、と信じています。

「よかったこと」を探すゲーム

魂の編集長

少年犯罪の弁護士はこう考える

水谷　もりひと

『赤毛のアン』や『若草物語』などと並ぶ児童文学の名作に『少女ポリアンナ』がある。

牧師の娘ポリアンナはとても明るい11歳の女の子。母親を幼少の頃に亡くしているが、優しい父親と2人で幸せに暮らしていた。

父親はポリアンナに「よかった探しゲーム」を教えた。どんなにつらいことが会っても、「よかったこと」を見つけ、感謝するゲームだ。

ある日、父親は協会本部に「娘のために人形が欲しい」と手紙を書いた。ところが協会本部から届いたのは松葉杖だった。ポリアンナはがっかりする。なぜ松葉杖が送られてきたのか分からないが、父親は「これもゲームにしよう」と言う。松葉杖を玄関に置いて、1日が終わった時、それを見ながら「今日も松葉杖を使わずに済んだ。怪我もなく、1日が終わったことに感謝しよう」というわけだ。

やがて父親が急死。ポリアンナは叔母の家に引き取られる。意地悪な叔母はポリアンナに小汚い屋根裏部屋を用意した。お手伝いのナンシーは女主人の性格の悪さを知っているので「かわいそう」と思うが、ポリアンナは「窓から綺麗な自然が見える。壁に絵がなくても寂しくないわ」と言う。

また初日の食事がパンとミルクだけだった。しかも台所で食べるように言われたが、「私、パンとミルクが大好きなの。それにナンシーと一緒に食事ができて嬉しい」と喜ぶ。

どんな逆境の中でも「よかった」と思えるポリアンナにナンシーは驚く。彼女の性格は次第に周囲の人たちを明るくしていくという物語である。誰もがいい話だなと思うだろう。だが、弁護士の伊藤芳朗さんは違った。数多くの少年犯罪に関わってきた伊藤さんは言う。

「あの子たちは事件を起こす直前まで被害者だったんです。でも、誰もあの子たちの被害について気づいてあげられなかった。追い詰められ、溜まったストレス、苦しさ、つらさ、悲しみ、寂しさがピークに達した時、爆発する。それが少年犯罪です」

□■△▼◇▼◆

2001年、佐賀県で起きた17歳の少年によるバスジャック事件で一人の命が奪われた。事件後のマスコミ報道によると、少年は小学1年生から中学生までひどいいじめを受けていた。だが、彼はそのことを親に言わなかった。両親はとても愛情深く、教育熱心だった。

父親は、彼が小学生の頃、家に「よかった探し箱」を置いていた。その日、「よかった」と思うことを紙に書いて箱に入れ、週に一度家族で「こんなことがあったんだね。よかったね」と言い合っていたそうだ。

「きっとポリアンナの本の影響でそんな箱を置いたんでしょう。彼が追い詰められたのはこの箱が原因じゃないか」と伊藤さん。

「よかったこと」を探すことが息子の心を育てる家庭教育だと両親は思っていた。「そんな親には彼は、『今いじめられて苦しんでいる』と叫べなかったのではないか」と。

ポリアンナがどんなことでも「よかった」と思えたのはキリスト教という宗教的背景もおおきかったのではないか。そういう背景のない子どもの場合、自分の苦しい気持ち、つらい心、寂しさを「よかったこと」とすり替えないで、そのまま丸ごと受け止めてくれる人がいないと救われない。

また伊藤さんは、「少年犯罪の直接の原因は母親にあるケースがほとんどです」と話していた。

「でも母親を責めることはできません。母親に不安や孤独感を与えているのはその夫だからです。支え合っている夫婦の子どもは絶対に非行に走りません。家庭に争いがあるくらいなら、離婚したほうが子どもは幸せです」とも。

もう一度、伊藤さんの言葉を噛みしめたい。

「あの子たちは事件を起こす直前まで、被害者だったんです」

（日本講演新聞　2004年4月12日号社説より）

■臨床心理士による『相生っ子悩み相談』(要予約)

令和8年　1月23日(金)　午後1時～5時
　　2月27日(金)　午後1時～5時

■センター職員による教育相談もご利用ください。

○来所相談　毎週 火曜日～金曜日　午後1時～4時
○電話相談　毎週 月曜日～金曜日　午後1時～4時
(ただし、祝日は休み)

友達に言えないこと、
両親に言えないこと、
先生にも言えないこと、
ひとりで悩んでいないで、
気軽に電話してください。
小・中・高校生・保護者
ご家族の皆さんもどうぞ。

※一人で抱えこまず、お気軽にご相談ください。
※問題に立ち向かうための元気づけ、勇気づけができればと思っています。